

地球第九卷第三號

昭和三年三月一日

北支那先史時代の人類に就いて

小 川 琢 治

近頃北支那の處々から石器時代の遺跡の發見が報告され、京漢鐵道線の工事中に河南省北界で殷墟が發掘されて龜骨及び牛角に刻まれた卜辭の出土を見た二十年前に比して更に古い先史民族の存在と分布とに關して一道の光明が認められて來た。後者は青銅時代の黎明期を代表するもので鐘鼎に刻まれた金文の主として周代に屬するに比して更に古い文獻の存在が明かとなつたのであるが、前者は是よりも遙かに遠い石器文化の時代に屬する文獻に徴し難き過去人類の遺跡で、東亞に於ける民族の源流を知る端緒が漸く見つかつたものとして特殊の意義がある譯である。

此の發見は一方に於ては地質時代から歴史時代に遷る橋梁たる先史時代の確かな材料を獲て、先住者と現住民族との關係を明かにすると同時に、當時の環境が現在と著しく異つた地文狀態に在つた事實を知る手掛りともなるものである。歐洲の先史時代に見る如き氷河の進退消長により人類の居住が大なる影響を被むつたのとは事情を異にすれども、中亞とその邊緣地帯との間に跨る北支那

にも亦た石器文化の當時から今日までの間に起つた地文的變化が相當著しきを想はしむるものである。

我々は明治三十五六年の交に故成田安輝氏が庫倫の南で採集した瑪瑙質の手際好き打製石鏃を見た後、明治四十三年洛陽骨董舗で一箇の閃綠岩質の磨製石斧を購ひ、又た島村(孝三郎)法學士の案内で大連濱町其他の關東州石器遺跡を見舞ひ、撫順炭田の東部の畑で二三の石斧を拾つた經驗もあつたが、此等の斷片的材料から石器時代の住民に就いて何等纏つた概念を組み立て能はなんだ。然るに天津加特力宣教師リサン氏の十年の久きしに互る北支那踏査發掘の結果が發表され、一面北京地質調査所のアンダーソン博士の甘肅河南遼西に於ける發掘の報告が公になつて、我々は五里霧中に在つた状態から未だ全く脱却し得ぬまでも、少くも疑雲の一角分が切れて峰尖が現はれ谷底の溪流が見え始まつて全景が眸中に集まる時が近づいた感を起し來つたのに對して快哉を叫ばざるを得ぬ次第である。

特に昨年北米人類學會の聯合機關たる『米國人類學報』American Anthropologist (第二九卷第二號)にネルソン氏の『北支那に於ける考古學的探究』と題して掲載した論文は此の方面に於ける最近の進歩を概括して略ぼ面目を明確にしてゐる。我々はこの一篇を枝折りとしてリサン、アンダーソン兩氏の結果を通覽し、且つ我々の多年支那上古の地理と民族に關する研究の一部を之に參照して發掘の結果に文獻から觀た解釋を加へて見たいである。

我々の第一に特筆すべきはリサン氏の古石器の發見である。

リサン氏は一九一四年以來黃河流域の博物學上の探檢に従事しつゝあつて、その報告によれば踏査せる線路網の密なること從來歐米旅行家の主として交通幹線に沿ふたものと全く趣を異にしてゐる。而して此の驚嘆すべき不撓不屈の勞力は幾多の地質學及び生物學上の新材料の發見によつて酬ゐられ、殊に處々で先史時代遺跡に出會つた譯である。リ氏の此に關する報告は巴里人類學報「Anthropologie Tome XXXV, pp. 63-74, 201-234.」に出で、前者は東蒙古新石器に關し、後者はオルドス(鄂爾多斯地方即ち甘肅省東北部)の古石器に關するもので、共に巴里博物館及び人類學會から派遣されたティヤル・ド・シャルデン Teilhard de Chardin と共に探究された結果である。我々は問題の順序に従ひ後者を前にしてその梗概を擧げることにする。

兩氏のオルドス地方の旅行は一九二三年のことで、寧夏府の對岸に當る橫城の東に當る長城に沿ふたシヨエイトンコウ Choei-tong-kou (發音不明水墩口?) に於て最初で又た最重要の遺跡に行き當つた。此處は地質から言へば地盤が鮮新世の瀚海層(1) (リ氏は黒海赤土 Terre rouge, pontenne と呼ぶ) より成り、その浸蝕を受けた後に(2)黃土及び黃土以後の(3)河成堆積が之を被覆し、石器層は黃土中に夾在し、堆積當時は湖水に近いと想はれ、此から出たものは大抵一面だけ手荒く打ち割つた形狀を呈し、ムステリアンからオーリニヤシ안의古石器に酷似し、且つ之と共在する獸骨には野生驢 *Equus hemionus* (及び馬?) 野牛 *Bos primigenius* 駝鳥 *Struthioithus* 羚羊 *Rhinoceros tichorhinus* (歐洲洪積期中部及び上部に出るもの) 豹 *Hyena* 大形の反芻類(アル

ガリに似たものゝ齒等がある。

リサン氏は是より前に一九二〇年に此處から約五籽の東に當る紅沙堡の敗城の近傍で既に犀の頭蓋骨と共に加工した硃石を黃土層中から發見したこともあつたが、當時左ほど重要な意義あるものと思はなかつたといふ。又たその東三〇籽の清水營でも黃土の崖から立派な燧石の鑿莖 *Percuteur* を拾つたといふ。

第二の產地は同じく長城に接したシアオキヤオバン *Siao-kiao-pan* で、是は榆林の西南に當るシヤラオソゴル *Sjara-osso-gol* (西拉烏蘇河) の上流に在る。此處では砂と粘土の互層した湖成層と古い砂丘堆積砂層との間に出で、古石器は少いが獸骨多く、前に舉げたものゝ外に麋、駱駝、狼等を出し且つ日本及び支那に發見された象 *Elephas namadicus* と想はるゝものをも出してゐる。その中犀の如きは完全な頭蓋骨も發見され、羚羊は *Garelle przewalskii* に近似すといひ、駱駝も亦たネーリングの露國洪積層から記載した *Camelus Knoblocki* と同じ大きなものであるといひ、動物群は歐洲洪積世中部層のものに明かなる類縁を示すのである。

此他尙ほ涇陽府の近傍でも榆林の南の油房渡 (?) *You-fang-teon* でも黃土中から古石器を採集した。又た北方三道口 (寧夏の北) の對岸アルブルス (阿爾布斯山) の麓から打ち割つた硃石を發見した。

此等を通觀すれば古石器の分布は陝西甘肅兩省の北界からオルドス一圓を含む廣い地域にわたることが知れ、蒙古高原の内部が鮮新世の一大湖盆を成し時代に次いで漸く乾燥なる現狀に變化する

間に洪積世の中葉に既に黄土の成生堆積が始まらんとする頃は尙ほ相當に濕潤なる氣候が周邊を支配し現在よりも大湖水の名残りが廣く大きく存續し、河流も亦た多かつた時代であつたと推測されるのである。

リ氏の成績中日本古象と同種と想はるゝものが此の古石器遺跡に發見されたことは特に我々に面白い。是により將來日本で搜索すべき古石器を含む地層の存否も亦た濱名湖及び琵琶湖及び淀川筋の如き古象を含む洪積層中に於て行はねばならぬことが思ひ當る。

リサン氏の第一の報告は東蒙古西拉木倫河 *Shira-muren* の西に在つて赤峰縣の西北に當る興安嶺東麓の林西 *Lingsi* に發見された新石器時代遺跡で、市街の東南に三乃至四方料の凹地が砂に埋められ、砂邱の移動に因りその地盤の黒土が露はれ、石器はこの層から發見された。小形のもの石質は磐玉佛頂石、煙水晶であるが、大形のものには流紋岩、花崗岩等もあるといひ、その長さ七寸に達する葉狀の石器は北米ムアヘット氏は一見して北米新石器時代の鍬と同一と認め、同氏は北米先住民の東亞からの移住を證する好材料すら考へた。その製作法は圖によれば一は好妙なる打製で、一は更に精巧なる對稱的の柳葉狀に中央に棟をつけた磨製である。是により支那に於ける農業の淵源の遠いことが窺はれて面白い。

三

リ氏と前後相踵いで支那に來たアンダーソン博士の研究は鮮新世の赤土 (*Hipparian Series*) に始まり、石器の發見に注意したが、その最初の論文には北支那に古石器時代又は古い新石器時代に屬

する人類の存在した確證なしといひ得るのみと結論した。而してア氏の一九二一年の最初の發見は河南省洛陽の西に當る澠池縣停車場の北五哩のヤンシャオ Yangshao (仰韶?) 墟址で、此處は赤土の臺地に百餘尺の溝の堀れた處で、之が爲めに石器層は孤立した柱狀を成して殘存し、石器その他の遺物は赤土中に掘つた井中に投げ込まれた形跡を示してゐるといふ。

ア氏は此處から十六體の人骨及び土器骨器等をも發掘し、その土器は手造り及び轆轤を用ゐたものを含み、その焼き方にも素焼の外に外面を磨き黒く又は赤く光るまで強く焼いたもの、白色黒色又は赤色の彩色を施したもの、三種があり、且つその形狀には所謂三代銅器に見る如き中空の三足(欸足)の鼎即ち鬲レキに相當するものがある。

アンダーソン氏の此の石器時代を Eneolithic age (末新石器時代) と呼び、銅器時代に遷らんとする過渡期を代表するものと考へた。

第二も亦た同年遼西錦州の西に當る沙鍋屯 Sha-kuo-tun の發掘で、此處は遼西山地の石灰岩の麓に沿ひ沿岸平地の發達した地方で、處々に洞穴が山足に在る。沙鍋屯洞窟は海拔二一六米の處に在つて東北東に面し、長さ六米、幅二・五米、高さ二米に達し、天井に半米を餘して柔軟なる灰色埴土が平らに之を充填してゐた。遺物はその下底部に在つて若干は上層からも出たといふ。

出土品中に海棲介類獸骨もあつたが、就中重要なるは四十五體の人骨、打製石器(その中錐一本石鏃三本を含む)、磨製圓板釦玉、土器で、この土器も澠池陶器に類似した、彩色陶器を含む。

第三はア氏の一九二三、四年に跨つた甘肅省の探檢で、就中蘭州附近に於て面白い發見があつた

此處では遺跡に村落と墓場との二種あつて、古い村落は黄河に沿ふた段級中の中段に位し、その浸蝕された島又は半島を成した部分を選んだのは要害の關係であつたと想はれる。ア氏は實檢した二十七ヶ所の遺跡を土器の様式、銅器の在否等により六類に區別し、上の三類には銅及び青銅(?)の器具を含む。

河南の土器に比すべきものは第五類にして鞍狀の口及び款足を有するものを出し、之と異なる點は銅器の隨伴することである。又た第六類の粗製土器は蒙古境に出で、その様式は波斯スサのものに類似する點からア氏は西方との關係を可能と考へた。

然れどもネルソン氏は此等の陶器の様式中に相似性があることを指摘し、將來その中の或る類は同時代に屬することが證明されぬとも限らぬと考へた。又たネ氏はア氏が宿論たる支那の末新石器時代に對する地中海文化の影響が此の發見により證明されたとする意見には尙ほ首肯し難き所ありとした。

以上三ヶ所からの出土人骨の研究はブラック、ステブンス兩博士が行ひ、之を北支那現住人の首格に比較し、大體類似の點が多く、甘肅出土の百二十體中にもア氏の第二第三兩段から出た四箇の頭蓋骨だけは西方人種と共通點ありと認めらるゝも、それすら特性の總和は原始支那人の型式と根本的に類似すといふ。ネルソン氏は是からも先史時代の人類の現住支那人と異つたものとして西方からの移住を高調せんとするア氏の意見に反對する様に見える。

ア氏は奥國フランス博士及び瑞典アルネ博士の河南土器の近東との類縁から西曆前三千年と見積

つた考説に一步を進めて之をスカンデナブリア及びクレタ島の考古學的記録に比較して甘肅六段の石器文化の期間を各三百年とし、その最新の年代を紀元前千七百年まで降り得ると考へた。此の考説に従へば先史時代と傳説的歴史の初まる堯舜時代との間に尙ほ三四百年の間隙が残るに過ぎぬこととなる。然れども勿論數量的の論據が精確を期し難いから、我々は寧ろ最後の石器時代が堯舜禹契后稷等の神話によつて畫かれた東亞文化世界に略ぼ相當すると考へたい。

四

我々の尙書其他の儒家傳統に屬する文獻以外の材料を探つて得た所では、夏殷周三民族は何れも黃河西北に起り、第一者はアルタイ山脈東南邊緣に、第二者は天山と北山の間沙漠邊緣に、第三者は北山と南山との間の甘肅省泉地にその郷土を有し、前二者は先づ黃河最北の屈曲部に出で、今の包頭（漢代莫貳縣、穆天子傳斷多之汭）がその東遷の要路に當つたものと認めた（内藤博士還曆紀念支那學論叢、狩野博士還曆紀念支那學集説、史林昭三、第一號參照）而して殷人の舊封と稱する商といふ土地は洛水上流に求むべく、契は蒼頡と同じく書契の發明者に關する傳説ならんと信ずるもので、又た商周銅器に見る鬲は土器から導かれと考へ、ア氏の河南に發見したものは殷人祖先の遺跡であると考へ得る。

遼西沙鍋屯の場合は位置から觀て漢の徒河縣に當り、逸周書王會篇に不屠何といふ東北方の一蕃族の居た地方に屬する。

昨年夏濱田博士等の發掘した貔子窩石器時代遺跡は二段に別れ、その一は戰國時代の鉅燕に屬し

た形跡が刀錢から察せられ、半兩まで含まれ、此等は戰國より秦を経て漢初に至る通貨であるから従つて戰國以後の遺跡たるは明かで他の一の銅器を含まぬ方が王會篇の良夷でないかと想はれるである。

此等を併せ考ふればア氏の末新石器時代なるものは土器の様式に立脚し、嚴密なる年代を之に賦與することは頗る危険であると想はれる。然れども西方から幾多の民族が東遷し、我々の溯り得た以前から土器文化の幾段にもより代表されることが知れた點は非常に面白く感ずる。

ネルソン氏の反對説の論據の一たる石器時代人類の骨格の北支那現住人と類縁の著しいといふ事實とすれば、我々は文獻時代から原史時代を経て石器文化時代に至るまで通じて行はれた中亞民族の移住が是から證明されると信ずる。

信州横川峽の梯狀脈蛇石に就て

(圖版第三版附)

八 木 貞 助

緒 言

中央線辰野驛を距ること西方三里半天龍川の支流横川川の上流に當る長野縣上伊那郡川島村字川上入には里俗蛇石ジヤイシと稱する梯狀脈 Ladder Veins の見事に露出せるものあり。是即横川峽底の黑色粘板岩の成層面に沿ひて進入せる帶白褐色の岩床 Intrusive sills or sheets ありて、更に此岩床を